

キトラ古墳・高松塚古墳壁画についての覚書

石橋茂登

I はじめに

わが国の古代における壁画古墳はキトラ古墳・高松塚古墳の2例が知られている。両古墳は墳丘や石室¹の構造とともに、四神、日月、星宿といった壁画の主題と、各図像において強い類似性が看取される。ほかに石室構造が類似した終末期古墳としてマルコ山古墳、石のカラト古墳²が知られているが、これらには壁画が描かれていない。

過去には高松塚古墳の壁画について高句麗古墳壁画との類似性や、唐の壁画墓との類似性が言われたこともあり、その文化的影響を念頭に考える場合が多かった。壁画については美術史の視点で図像の比較や描画技法などについて研究されてきた。天文図・星宿図はその専門家による検討が行われている。しかしながら、石室内における壁画の構成、あるいは天文図について、考古学的な知見を交えた全体像の検討にはまだ研究の余地があるように思われる。本稿ではキトラ古墳・高松塚古墳の壁画について、中国・朝鮮半島などとの比較をしつつ、浅学を顧みずに現時点で考えるところを若干述べてみたい。

II キトラ古墳・高松塚古墳の壁画の概要

キトラ古墳と高松塚古墳³はどちらも奈良県明日香村に所在する終末期古墳で、7世紀末から8世紀初頭の築造と考えられている。墳丘内には二上山の凝灰岩切石を組み合わせた石室があり、石室内は棺が一つ入る程度の狭い空間である。キトラ古墳の石室は内法で奥行240cm、横幅104cm、高さ124cmで、天井は緩やかな屋根形に刳り込まれている。高松塚古墳の石室は内法で奥行265cm、横幅103cm、高さ113cmで、天井は平らである。両者とも石室を組み立てた後、南壁が開いた状態で石室内の全面に漆喰を塗布し、その漆喰上に壁画を描く。このことは石室南側の側壁小口の漆喰の状態から確認できる。南壁石は納棺後に閉じる閉塞石であり、この壁画面だけは他の石と組み合わせる前に漆喰を塗布して壁画を描いている。キトラ古墳南壁の朱雀は精緻な筆致であり、南壁石を平置きした状態で描いたことを推測させる出来栄である。高松塚古墳南壁の壁画は失われているが、同様に朱雀が描かれていたであろう。石室の形態、遺物、壁画などの検討から、キトラ古墳の

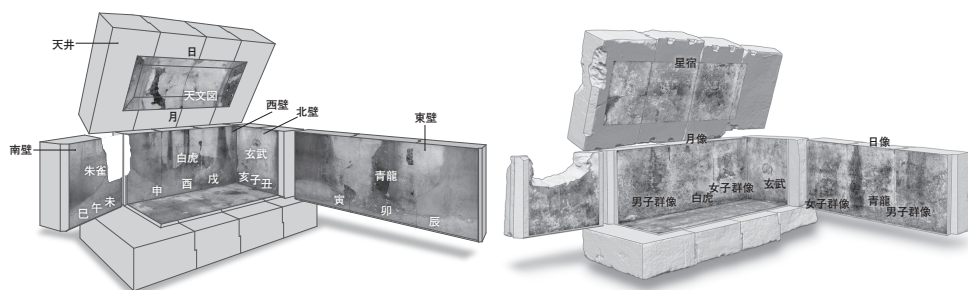


図1 石室展開模式図 キトラ古墳(左)、高松塚古墳(右)

ほうが先行し、高松塚古墳を8世紀初頭とみる見解が有力である。

描かれている壁画の図像構成は、両者に違いがある。より古いとされるキトラ古墳では、天井に円形星図の天文図⁴と日像・月像、東西南北の壁面には方位と対応する四神が描かれ、その下に3体ずつ十二支が描かれている。高松塚古墳では天井に北極・四輔を中心として二十八宿を矩形に配置した星宿図があり、日像は東壁、月像は西壁の上部に描かれている。四神が東西南北の壁面中央に配置されている点はキトラ古墳と共通するが、十二支はなく、男女群像が描かれている。四神や日像・月像の図像は両古墳で似ているが、白虎の向きが違い、細部の彩色や文様にも異同がある。また四神の図像は高松塚古墳のほうがキトラ古墳より大きい。天文図と星宿図はどちらも円形の金箔を赤い線でつなぎ、中国式の星座をあらわしている。

Ⅲ 中国の壁画古墳との比較

キトラ古墳・高松塚古墳に近い時期を中心として中国の壁画古墳と両古墳を比べると、従来言われているとおり、人物像の並び方や描写などは西安周辺の壁画古墳との類似性を感じさせる。画風は唐の流行を取り入れているといえる。ただし、隋唐の壁画墓と似ている要素は限られており、相違点のほうが多い。

隋唐の壁画墓にもさまざまな形態があるが、西安周辺では長大な斜道と単室または複室の墓室をもち、壁画は斜道に青龍・白虎と列戟や出行図を配し、主室内に朱雀・玄武・星辰・人物図を描くものが特徴的である。室内には柱や梁、斗拱などを描いて、宮殿を模している場合や、屏風のような枠と人物図を配する場合がある。屏風ふうの壁画は南北朝時代から唐代の壁画墓にみられる。また、斗拱などをあらわし宮殿の赤い梁と柱で矩形に区切って人物などを描くものがある。各図像が大きく描かれる点はキトラ古墳・高松塚古墳と違っており、高松塚古墳のように無地の壁面に人物群像と四神が並列して混在する構図はみられない。

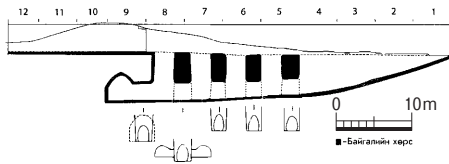


図2 ショローン・ブンバガル古墳

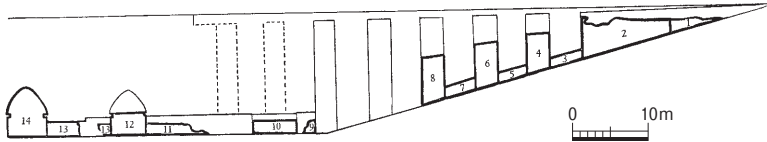
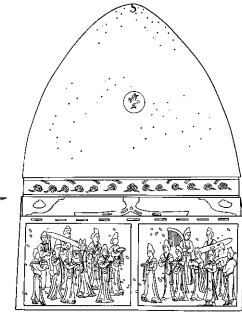


図3 懿徳太子墓

図4 懿徳太子墓
墓室壁画

唐様式の壁画墓は中国国内にとどまらない。筆者はモンゴル共和国のショローン・ブンバガル古墳を訪れて調査したことがあり、西安から直線距離で1,500kmも隔たったモンゴルの地において、唐墓の基本的な構造や壁画の構成に則っていることが印象的であった。ショローン・ブンバガル古墳の被葬者は唐から將軍号を授けられた突厥族の都督（東2013）、あるいは僕固思邈などと見られている。同じモンゴルの羈縻支配期の唐様式墓であるザーマル古墳は墓誌から金微都督の僕固乙突墓（678年）と判明しており、ショローン・ブンバガル古墳はそれよりやや古いとみられる。これらの古墳は、遠隔地でありながら関中地区の壁画墓の構造や壁画をよく模倣していることから、墓を設計する人や壁画を描く人がやって来た可能性をうかがわせる。少なくとも関中地区の壁画墓を熟知していなければ、できないであろう。こういった事例から、唐代において高級な墓というのは斜道で地下へ下り、地下の部屋に棺を安置し、壁画はここに青龍・白虎、人物、天象などを描くべしという、基本的な構成観念があることが看取される。

ひるがえってキトラ古墳・高松塚古墳を見ると、古墳の構造上、墓道が存在せず、棺を入れる空間が小さな石室として存在するだけである。すべての壁画はその石室の中に押し込められている。高松塚古墳の持ち物をもった従者の男子は、石室内よりも墓道にいるほうがふさわしいだろう。石室内は赤い柱や梁を描いて宮殿内風とするか、屏風のように各画面に輪郭を描くほうが中国式になりそうだが、そうはしていない。こういった点は中国の壁画墓と異なる。四神については、中国でも朱雀や玄武が墓室内に描かれている例は存在するが、一般的に初唐では墓道に青龍・白虎、墓室に朱雀・玄武を描き、盛唐では墓室に四神を描くとされる（上田1972）ことと異なる。キトラ古墳・高松塚古墳について、本来、青龍・白虎は墓道に描くべきであり、おかしいという意見を聞くことがあるが、唐代でも四神が墓室内にいることはある。東潮（東1999）の整理では墓室内に四神がいる例は北朝から晩唐までみられ、墓道に描かれる事例は700年代以降に特に多い。キトラ古墳・

高松塚古墳で四神が墓室に揃っているのは、墓の構造および7世紀末から8世紀初頭という時期によるところが大きいであろう。

IV 朝鮮半島の壁画との比較

朝鮮半島においては、高句麗古墳に多数の壁画が描かれている。江西大墓・中墓の四神図は著名で、キトラ古墳・高松塚古墳の四神図には高句麗の影響が言われたこともある。しかし、7世紀初頭頃を最後に描かれなくなる高句麗の壁画と、キトラ古墳・高松塚古墳とは年代的な隔絶がある。また、四神の図像自体にかなりの相違があり、高句麗古墳の四神図はキトラ古墳・高松塚古墳とは別系統である。百済の東下塚（陸山里1号墳）、宋山里6号墳の四神も同様である。高句麗古墳壁画は時期ごとに題材が変化することが明らかになっており、墓主像や生活図が描かれるものは、より古い時期である。また、その場合でも人物描写は高松塚古墳の唐風とは大きく異なっており、およそ高松塚古墳に高句麗との系譜関係はうかがえない。天文星象は、高句麗では北斗など一部の星座が強調して描かれ、キトラ古墳のような円形星図も、高松塚古墳のような二十八宿を整然と並べたものもなく、共通性が見いだせない。古墳の墳丘・墓室構造も大きく異なっている。

V 天文星宿の図

中国の古墳に天文が描かれた最古の記録は始皇帝陵とされ、「上具天文、下具地理」と『史記』に記されているが、具体像は不明である。知られている中では西安交通大学構内の古墳（紀元前229年）の天象図が最古とされ、円形の星を線で結んで表現した二十八宿と、

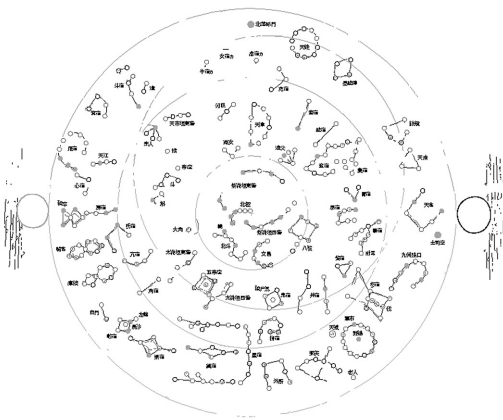


図5 キトラ天文図

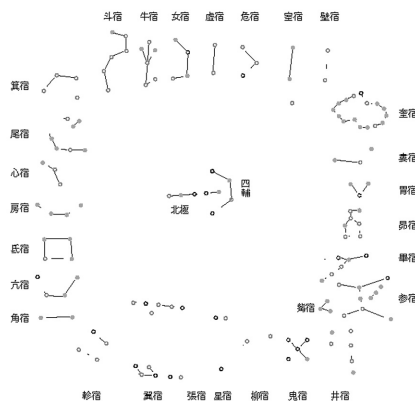


図6 高松塚星宿図

日月像などが描かれている。

以下、莊蕙芷の整理（莊2016）を参考に検討しよう。前漢・後漢・魏晉南北朝時代を経て、北朝晩期には高級な墓室の天井に天文を描くことが主要な題材の一つとなる。北魏の皇族である元乂墓（525年）では天の川と無数の星々が描かれ、配置は正確ではないが、40～50ほどの星座が線で結ばれて表現される。北極などの紫微垣は明確ではない。

関中地区における唐代の壁画墓について、初唐では壁画墓が53基あり、そのうち14基に天象図が描かれている。盛唐では同じく23基中6基に天象図があり、中晩唐期では壁画墓そのものが減少し12基中の3基となる。すなわち壁画墓、天象図そのものが初唐に多くみられ、次第に減少する傾向にある。

北方地区（山西・寧夏）では唐代の壁画墓自体が多くないが、太原焦化廠墓のごとく墓室壁面の下部に人物像、上部に四神と星辰を描く例がある。

南方地区（湖北・重慶・浙江）では、晩唐からそれ以降になるが、呉越国の銭氏一族の古墳が興味深い（図8～13）。銭寛墓（初代王である銭鏐の父）、水邱氏墓（銭鏐の母）、銭元瓘墓（2代王）、馬氏康陵（銭元瓘の後）、呉漢月墓（銭元瓘次妃）には180～220ほどの星、二十八宿と内規・外規・赤道がある。キトラ天文図以外に内規などの三円を描く壁画はほとんどなく、構成に類似性も感じさせる。銭寛墓、水邱氏墓、馬氏康陵では、天井の星が金箔貼で、紅色刻線でつなぐとされる。呉漢月墓では墓室内の彫刻に青龍の尾が後脚に絡まる図像が採用されている。また、馬氏康陵では四神すべてが墓室内に描かれている。

天文星象について、『漢書』天文志では星座（星官）は118、星の数は783とされる。三国時代に呉の陳卓が石申・甘徳・巫咸の星表をまとめた星図は283星座、1,464星であった。南宋の「淳祐天文図」（1247年）、朝鮮の「天象列次分野之図」（1396年）は280～290星座、およそ1,400星がある。実用の全天の星図であれば、三国時代以降なら陳卓の星図と同程度の数があってしかるべきである。呉越国の銭氏一族の古墳は、いずれの天象図も大幅に星が少ないことから、墓室壁画としてデフォルメされていることが明らかである。また、



図7 「淳祐天文図」（1247年）

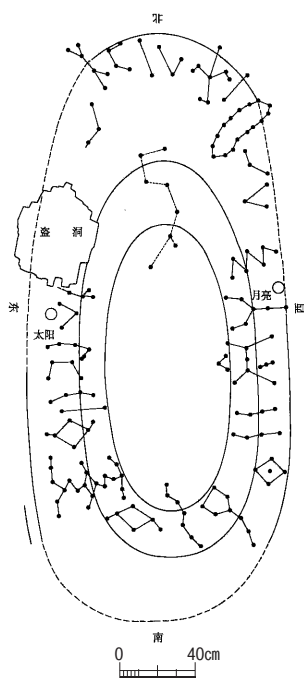


図8 銭寛墓

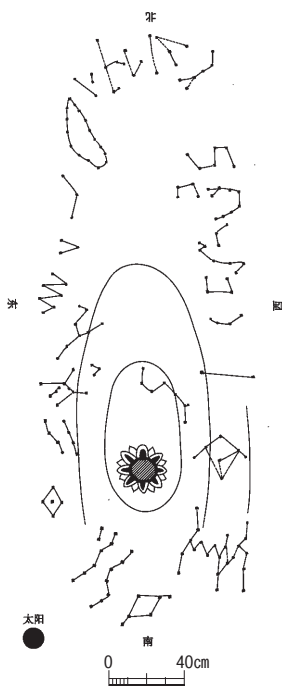


図9 水邱氏墓

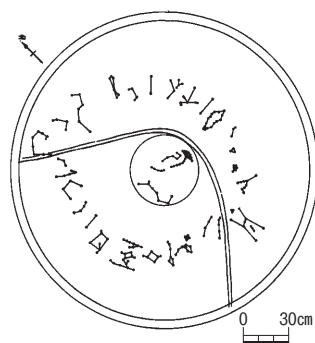


図10 馬氏康陵

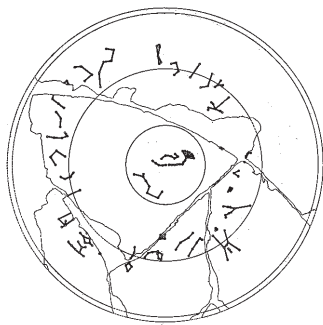


図11 銭元瓘墓

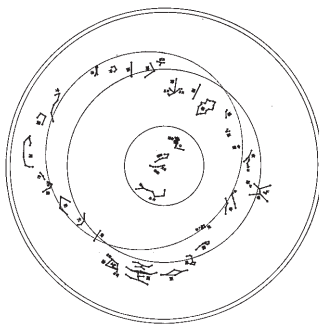


図12 850年の図

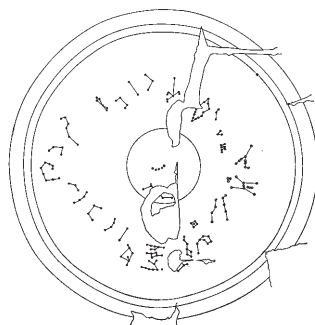


図13 呉漢月墓

星座が正しい向きではないなどの間違いも散見される。

銭氏一族の墓に描かれた天象図では、銭元瓘の後の馬氏康陵（939年没）が218星で、二十八宿と北極・勾陳・華蓋・北斗、銀河、内規・外規など充実した内容をもつ。2代王の銭元瓘墓（941年没）は183星で32の星座があり、二十八宿と北極・北斗・勾陳・華蓋があらわされ、内規・赤道・外規はあるが銀河はない。銭元瓘次妃の呉漢月墓（952年没）は178星で30の星座があり、赤道・銀河は省略され、二十八宿と北極・北斗だけがあらわされる。これら天象図の質・量の差は、身分の高低が影響していると言われている。銭元瓘

墓と後の馬氏康陵だけが天帝にさしかける日よけである華蓋を持つ点は、王・后という身分の反映とみても矛盾しない。しかし、錢元瓘墓よりその後の馬氏康陵のほうが充実していることや、馬氏康陵に赤道がないこと、3基の中では後出のものほど星が少なく簡略なことから、星の総数や赤道の有無はさほど重要ではない可能性もあろう。

ここで注目されるのは、北極の扱いである。北極五星は太子・大帝・庶子・后皇・天枢からなる。古代中国では地上世界と天の星々是对応関係にあるとされている。呉越国王は中国の伝統を重んじ強い天子意識を持っていたという（有坂1999）。初代王の錢鏐は907年に後梁から呉越王とされ、後に後唐にも従った。錢元瓘は2代目の呉越王で、馬氏は王后、呉漢月は次妃である。錢寛と水邱氏は初代王錢鏐の父母であるが、自身は王と后ではない。

二十八宿と北斗だけが描かれた錢寛墓と水邱氏墓は、被葬者が北極五星に含まれる身分には該当しない。対して、錢元瓘墓・馬氏康陵・呉漢月墓は大帝や后皇に相当するから、北極と対応する身分として天象図の星座の選択に反映された可能性がある。朝鮮半島では舞踊塚・角抵塚（4世紀末から5世紀初）にはいくつか星宿があり、徳花里2号墳（5世紀末から6世紀初）には北斗・南斗・二十八宿が描かれるが、いずれも北極は空白である。高麗王神宗陽陵（13世紀）の星辰図の中央には北斗が大きく描かれ、その周囲に二十八宿がある。網干善教（網干1999）は、北斗七星の第一星の天枢は北極星と同様にみなされ、天子の象徴であるから、北極五星の代わりに北斗七星を描いたという。しかし、呉越国王墓の北極の有無から考えると、北極を描かないことには意図があるのではないか。高句麗古墳壁画に北極が描かれず、北斗が描かれている例が多いことには、北斗信仰とともに選択的意味があった可能性がある。

呉越国王墓の水邱氏墓では中央に蓮華が描かれている（図9）。類例としては、河北省の宣化下八里遼代壁画墓がある（図14～17）。この古墳群の天井に描かれた星宿図は蓮華を中心として二十八宿と日月が配され、古墳によっては北斗、十二支、黄道十二宮を付加している。M10の張匡正墓（1093年）は天井の中心に蓮華を描き、周囲に赤い点と線で二十八宿、日月像をあらわす（図14）。単独の星には星座の星より大きく描かれるものがある。M7張文藻墓（1074年）、M3張世本墓（1088年）、M6張某墓も同様である。M1張世卿墓（1116年）は、中心に蓮華があり、日像、北斗、二十八宿などを赤い点と線であらわす（図15）。金烏のいる太陽と単独の赤色4星、藍色4星は大きく描かれ、日月と惑星を示すとされる。その外側に黄道十二宮をあらわす。M5張世古墓（1108年）では蓮華を中心に北斗、黄道十二宮、二十八宿、そして文官の十二支がめぐっている（図16）。単独の星は大きいものがある。M2張恭誘墓（1113年）もほぼ同じである（図17）。M4韓師訓墓（1110年）では蓮華を中心に日月、雲、金烏と簡略な二十八宿が描かれる。

林已奈夫（林1989）によれば、蓮華は太一すなわち北極にある天帝を象徴する文様であ

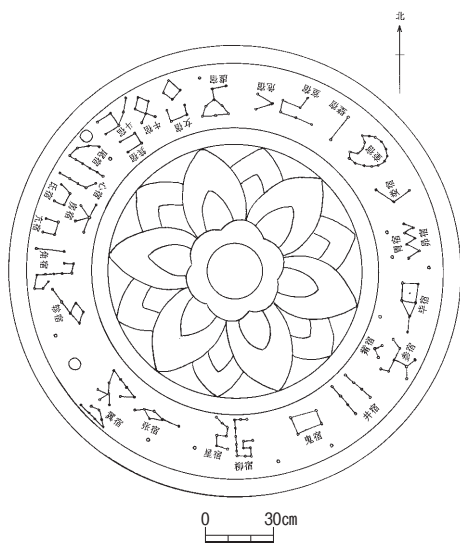


図14 M10張匡正墓

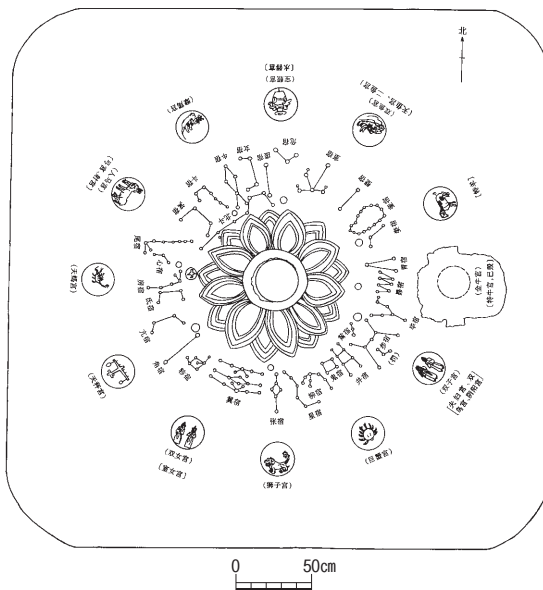


図15 M1張世卿墓

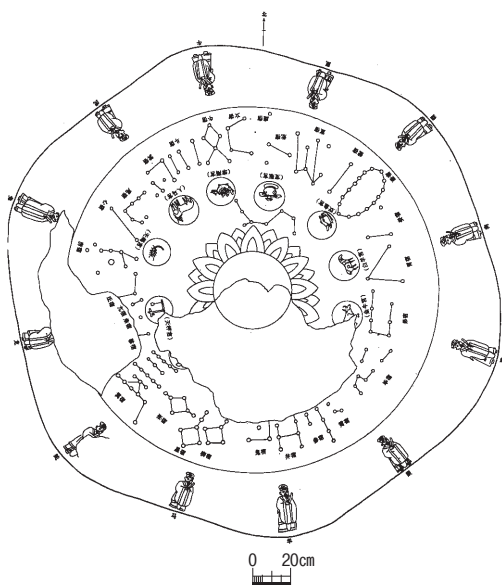


図16 M5張世古墓

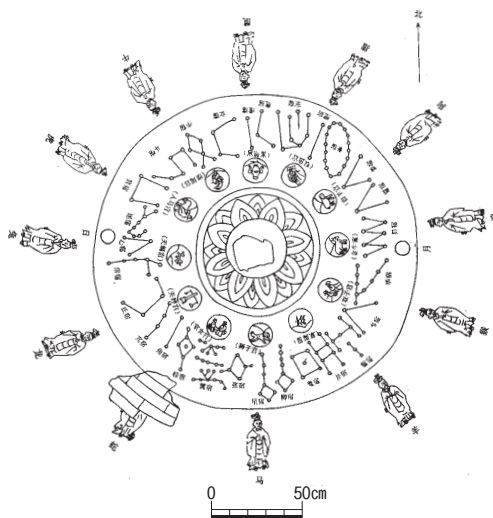


図17 M2張恭誘墓

る。最もシンプルには蓮華のみ、あるいは蓮華と日月像、二十八宿、さらに十二支を付加して、宇宙とその順調な運行を象徴する。高句麗の安岳3号墳や双楹塚奥室の天井中央にも蓮華が描かれており、同じ思想に基づいている。伽倻の高霊邑古衙洞壁画古墳（6世紀末）も天井に蓮華文があるとされる（金1980）。これらは、あえて北極を明示することを避けて、蓮華で象徴した可能性があろう。百済・東下塚（7世紀）は、壁面に四神が描かれ

ているが、天井には天象図ではなく複数の蓮華文様と雲気が描かれている。これは同じような考え方に基づくのか、仏教的な背景があるのか検討の余地がある。

莊蕙芷の分析では、関中地区の唐墓で天象図をもつものは、時期によらず壁画墓の25%ほどで、被葬者の身分は三品以上に限定されている。このことから、天文図の私有や天文学の私習が法で禁じられていることとも関係して、法の明らかな規定はないものの、ある程度以上の者だけが天文星象の図を描くことができた可能性が考えられている。高松塚古墳では描かれている蓋の色から一位の人物が被葬者だとする推定が当初からあり、ほかの壁画の画題についても限られた身分の者だけが使用できるデザインだと指摘されている(猪熊2007)。キトラ古墳・高松塚古墳において天文星宿を描いていること自体が、被葬者が高位の人物であることを示している可能性が考えられよう。

中国の壁画墓の天井には天象図が描かれる場合が多く、ドーム型の天井に円形の星を散らし、日月や天の川(銀河・天河)を伴うこともある。しかし高松塚星宿図のようなものは例外的である。

新疆のトルファン・アスターナ古墳群の65ATM38号墓(8世紀)には、二十八宿を矩形に配置した星宿図が報告されており(図18)、高松塚星宿図の類例としてよく言及される。中央には北極を抽象化したと思しき5つの星があり、天の川を象徴する白線がある。また、矩形の配列には二十八宿とともに日・月像も入っている。古墳は発見後ほどなく崩壊したため、星宿図の正確な図面はなく、スケッチだけが残る。古墳構造や星宿図以外の壁画といった、それ以外の要素には高松塚古墳との共通点はほぼない。同じアスターナ古墳群の215号・216号墓は斜道で地下の墓室へ降りる構造で、壁画は赤色の四角い枠で区切った中に人物が描かれている。漢中地区との共通性がうかがえる一方で、高松塚古墳とは共通する要素がほとんどない。呉越国王墓と宣化下八里遼代壁画墓の事例から明らかに、天象図では北極と二十八宿が最も核心的な要素である。65ATM38号墓の星宿図と高松塚星宿図は、実際の天空に近い配置から様式化が進み、矩形に配列された形態である。両者には矩形の配置以外に共通点は少ないが、唐の星宿図が東西に広く伝播したことを教えてくれる資料ではある。

次にキトラ天文図・高松塚星宿図の原図に関連して検討してみる。汪(汪2002)によれば、中国で天文図の描かれた墳墓のほとんどが中原地域、特に各時代の首都地域

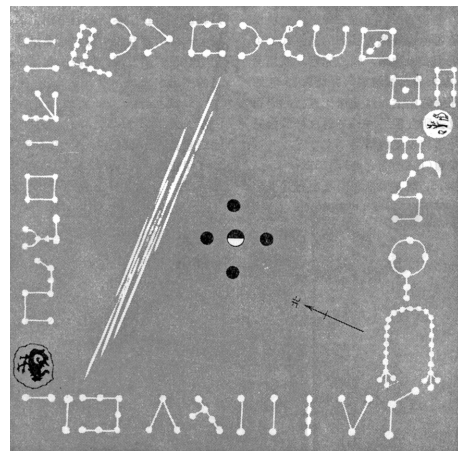


図18 アスターナ古墳群65ATM38号墓

に集中する。唐の兩京（長安と洛陽）地域ではほとんどが紫微垣を描き、ほぼ正確であるのに対し、周辺地域ではおもに紫微垣のない二十八宿をあらわす。また、描き間違いもみられる。汪はキトラ古墳・高松塚古墳の二十八宿が、高句麗や北朝と違ってほぼ正確な天文図に近似していることから、唐代の天文図の系譜に連なるものとみている。

キトラ天文図では、星の一部（北落師門、天狼、土司空）が他の星より大きくあらわされているという特徴が注目できる。星に大小をつける表現については、南宋の「淳祐天文図」（1247年）のほか、「敦煌星図」、「新儀象法要」、呉越国王墓などの天象図、唐代の原図によると考えられる「格子月進図」などからみる限り、中国の星図では基本的に星の大きさを変えることはない。朝鮮の「天象列次分野之図」（1396年）と、それを基にした後世の星図では、単独の星の一部について大きさを変えている。そこから「天象列次分野之図」の元になったと伝承される高句麗星図も星に大小があり、キトラ天文図の原図は高句麗系だと推定される（宮島2007）。ただし、キトラ天文図は「天象列次分野之図」とはかなり異なるので、「天象列次分野之図」の元となった高句麗の天文図そのものはキトラ天文図の原図ではありえない（宮島1999）。この高句麗の天文図は李氏朝鮮の太祖李成桂が「天象列次分野之図」を作成しようとしたところ、高句麗滅亡時（668年）に大同江に沈んで失われた天文図の印本が発見されたと伝承されており、いかにも都合が良すぎる。高句麗の天文図と称して別の天文図を使った可能性もあり、竹迫忍（竹迫2017）は唐後期（850-900年頃）の天文図が原図とする。伝承がすべて事実としても、高句麗の天文図で星に大小があったのかどうかは不確実である。ただし、高句麗古墳では徳花里2号墳などで北斗・南斗といった星座が二十八宿より大きな星で大きく描かれており、徳興里古墳でも単独星が大きく描かれている。高句麗では実用星図はともかく、墓室装飾用の天象図では古くから星に大小があったとみてよい。

中国の事例については、宣化下八里遼代壁画墓ではM10張匡正墓（1093年）、M1張世卿墓（1116年）などで単独星の一部が星座の星より大きく描かれている。これらは恒星ではなく惑星のようだが、少なくとも「天象列次分野之図」が作成されるより前、中国において単独星を大きく描く図が存在したことは間違いない。『中国古天文図録』（潘2009）所収の図版で探すと、後漢の山西省平陸東漢墓の天象図では星を線で星座に結んではいないが、大きい星が混じっている。唐中期以前の「紫微垣星図」（敦煌博物館）では一部の星が大きく描かれている。手書きの星図では星の大きさにバラツキがあるものも多く、明清代の星図には老人や狼などが周囲の星座の星より大きいものが散見される。

このような状況から考えると、中国の天文図は大勢としては星に大小をつけないが、まったくないともいえない。キトラ天文図が個々の星座の形などからみて唐の星図を元にしているのであれば、星の大小がある点は必ずしも朝鮮半島の影響に限らない可能性がある。

類例の増加を待って検討したい。

中国や朝鮮半島の古墳に描かれた天象図を概観すると、天井に円形星図風の天文図を描くキトラ古墳のスタイルはきわめて珍しい。キトラ天文図については、計算やシミュレーションによって観測年代や観測地を推算する研究がおこなわれたこともあって（宮島1999、相馬2016、中村2018）、高精度な全天の星図と誤解されることがある。しかし、星を金箔であらわすこと、各星座が大ぶりで精緻な図とはいえないこと、描かれているのが現状350以上の星で74以上の星座にすぎず数が少ないことなどから、実用の星図を写したのではなく、装飾用の絵画であることは明らかである。三円や距星などを使えば計算が可能というにすぎない。中国の呉越国王墓や宣化下八里遼代壁画墓と同じく、あくまで天文・日月・四神・十二支によって宇宙をあらわすための装飾壁画である。

呉越国王墓が北極・四輔・北斗と二十八宿をもって天の世界を象徴的に示しているように、キトラ天文図もその核心は北極・北斗を中心とする紫微垣（中宮）と二十八宿である。しかし個々の星宿は「淳祐天文図」などと比べるとかなり大ぶりに描かれており、その周りにある多くの星座は大幅に取捨選択されている。呉越国王銭元寛墓の天象図について、伊世同（伊1975）は開元年間の観測によるものとして850年の実際の星の位置と銭元寛墓の天象図を対比している（図11・12）。それを見比べると銭元寛墓の二十八宿はかなり大きくデフォルメされている。キトラ天文図も墓室装飾用の図として同様の処理をされている。すなわち、キトラ天文図は北極周辺と二十八宿を象徴的にあらわし、周辺の星座を配置して、全天の円形星図らしく仕上げた絵画である。この点は宮島（1999）、竹迫（2017・2018）、来村（2019）も指摘している。キトラ天文図で下書き線より大きく描かれている星座（張宿、五帝座、積卒など）があることも、絵画としてのバランスをとるためデフォルメしたと理解できる。実用の星図であればそのようなことはしない。

キトラ天文図について、一部の星座や黄道の位置の誤りは単なる書き間違いではなく、律令で天文図の私有が禁じられていることと関係した故意の改変だとする意見もある。しかしながら、法に触れることを恐れるのであれば、わかりにくい細かな改変をするより、一見して天文図ではないとわかる抽象的な星の絵にすればよい。また、高松塚星宿図にも星座の向きが左右反転のものがあり、後世の他の天文図においても誤りはしばしば指摘されている。例えば室町時代とされる瀧谷寺「天之図」では、星座の反転や位置の錯誤、重複などが指摘されている（吉澤2015、佐々木1989）。キトラ天文図は、元の粉本がそもそも陰陽寮や占星台で実用するための星図ではなく、星図ふうの装飾画である。天文図の私有や私習が禁じられているのだから、当然、天井に描き写した画師は天文学や天文図には精通していない。粉本の段階での間違いと、天井へ描き写す際の間違いが、キトラ天文図や高松塚星宿図にみられる間違いになっていると考えるのが妥当である。

次に金箔について検討しよう。キトラ天文図のように星を大きな円形金箔であらわすこと自体が絵画的な装飾であって、星の観測のためには円形が大きすぎる。星を金箔であらわすことは、中国の壁画墓においては章懷太子と房妃の合葬墓にはじまるとされる（汪2002）。章懷太子墓は神龍2年（706年）に造られ、天井には懿德太子墓や永泰公主墓と同様に銀灰色の下地に白い石灰で星を描いていた。その後、景雲2年（711年）に妃の房氏を合葬するに際して壁画が描き加えられた。後室天井には金銀箔で星辰を貼り付け、いくつかの星宿を復元できるとされる。汪の見解では金箔で星をあらわす技法は711年以降ということになる。しかし、この一点をもってキトラ古墳・高松塚古墳の両者を711年以降に下げることには躊躇する。711年以降も唐墓で星辰に金箔を貼る例はほとんどない。その一方で、高句麗の真坡里4号墳（6世紀後半）の天井には大小の円形金箔で星が表現されており（小泉1986）、こちらのほうが古い。しかしながら、高句麗古墳の天象図はキトラ古墳・高松塚古墳とは大きく異なり、直接の系譜関係にはない。そうかといって、金箔で星をあらわす技法が日本で独自に生まれたとみる根拠もない。おそらく、唐ではすでに7世紀末から8世紀初頭に金箔で星をあらわす天文星象の絵画が描かれており、キトラ古墳・高松塚古墳ではそのような絵画を粉本としたものと推測する。

VI その他の検討とまとめ

総合的に考えると、キトラ古墳・高松塚古墳の壁画構成の成り立ちは以下のように理解できる。

石室構造は石棺式石室あるいは横口式石槨と呼ばれる古墳石室形態の系譜上にある。石室・墓道の大きさや構造はそれによって決定されるので、そもそも中国のように斜道で地下に下りて墓室に至る構造にはならない。キトラ古墳・高松塚古墳では石室前面に短い墓道があるので、版築壁面に漆喰を塗れば壁画を描くことは不可能ではないが、そのようなことはせず、すべての壁画を石室内に描いている。

キトラ古墳の壁画では星座の形や四神の図像には中国の図像との類似がみられ、朝鮮半島の古墳壁画とは共通点が少ない。キトラ天文図には天帝の居所である北極や二十八宿などがあらわされ、天人相関思想にもとづく中国式天文図である。キトラ天文図は個々の星座が大きくデフォルメされており、周辺の星座は取捨選択されていることから、墓室壁画のために描かれた星図ふうの絵画である。キトラ古墳は天文図、日月、四神、十二支を組み合わせ、全体が四神相応、陰陽五行といった中国思想を背景としている。個々の図像からも全体の構成からも、高句麗古墳壁画とは共通性が低く、基本的には唐の絵画を基にしていると考えられる。

高松塚古墳の基本的な主題と画風はキトラ古墳と共通する。星宿図は北極・四輔と二十八宿だけが描かれ、キトラ天文図より一層、核心的な要素だけに整理されている。高松塚古墳は発見当初から、壁画の主題は人物や四神より天井の星宿図が重要であることが指摘されていた（吉田1972ほか）。キトラ古墳・高松塚古墳ともに、天文・日月・四神（・十二支）で、地上世界を覆う天の摂理を表現しており、天上の天帝と地上の天子が支配する世界観をあらわしている。

キトラ古墳の十二支が獣頭人身・袍服で武器類を持っている点は、隋唐の十二支が文官姿であることとは相違する。新羅では7世紀後半から8世紀前半とされる龍江洞古墳に副葬されていた、獣頭人身で上半身をはだけた平服の銅像十二支像が古い事例とされる。金庾信墓の石彫十二支像が獣頭人身・袍服で武器類を持ち、最も似ている。伝景德王陵では甲冑を身に着けており、十二支は武装化してゆく。これらの事例から、キトラ古墳の十二支像には新羅の影響が強いといわれるが、中国でも袍服や武器をもつ獣頭人身像があり、すでに類似の十二支像が存在した可能性も指摘される（川瀬2014）。それに対し、仏教の十二神将との関連を重視する見解もある（百橋2007）。統一新羅の十二支像は8世紀中葉に出現して盛行したものであるためキトラ古墳の十二支とは異なるとし、キトラ古墳の十二支が武器を持つのは元の図からそうであったか日本で案出されたかは不明としつつ、仏教の影響とみる見解（加藤2008）が、現状では穏当とすべきであろう。

壁面全体の構成について、写真図版で高松塚古墳の女子群像だけ、青龍だけを見ても違和感はないが、壁面全体でみるとキトラ古墳・高松塚古墳の四神や人物は、壁面に対して小さいと感じる。中国でも朝鮮半島でも、古墳の壁面に対して四神はかなり大きく描かれるのが通例である。石室そのものの小ささを考慮するとしても、両古墳とも図像をこぢんまりと描いていて、壁面全体をキャンパスとして絵画を構成したようにはみえない。なかでも不自然なのは、男女群像と四神の足元がほぼ同じ高さで、まるで青龍・白虎が従者たちと一緒に散歩しているように見えることである（図19）。壁面の漆喰は、施工当初は区切りのない一面の白いキャンパスである。壁画の下端は画師が座って描ける高さや棺の高さに規制されるだろうが、左右方向は自由に使えるはずで、もっと左右に展開することもできただろう。日月像は中国の諸例からすれば二十八宿とともに天井にあってもよく、四神をもっと上に大きく描いて飛翔感を出すこともできよう。

高松塚古墳の図像サイズは、人物像が上下左右とも40cm前後にまとまっており、東壁男子は蓋まで入れて上下58cm。四神は上下20～30cm、幅30～45cmに収まっている。あたかも別々の紙に描かれていた各図像を、そのまま描き写したようにみえる。キトラ古墳の四神や十二支も同様で、四神は上下15～24cm、左右25～40cmほどである。唐代の絵画の原本は遺例が少ないが、顧愷之の画卷を初唐に写したものとされる「女子箴図」（大英博物館）は



図19 高松塚古墳 西壁（上）・東壁（下）（コロタイプ印刷複製パネル）

卷子幅24.8cmである。盛唐の韓幹「照夜白図巻」（メトロポリタン美術館）は同30.8cm。「敦煌星図」（大英博物館）は24.2cm、「紫微垣星図」（敦煌博物館）は同31cmである。「搗練図」（ボストン美術館）は盛唐の張萱の画卷を徽宗が模写したとされ、唐代の原本ではないが、同37.7cmである。これを参考にすると、キトラ古墳・高松塚古墳の四神、日月、天文図、星宿図といった図像は、卷子などでもたらされた唐の絵画を適宜に拡大して描き写したと考えられる。それがゆえに唐墓の古墳壁画と違って細密な描写であるとともに、図像ごとの寄せ集め感があるのであろう。キトラ天文図は外規直径61cm、高松塚星宿図は80cm四方ほどの大きさがあるが、原寸大では星座や星がかなり大ぶりで絵画としてはアンバランスな印象があるので、これも原図を拡大したものと推測する。

キトラ古墳・高松塚古墳の四神の図像は、尾を後脚に絡めて跳ね上げる姿が7世紀後半から8世紀の盛唐期に流行した図像とされ（有賀2017ほか）、唐の流行を取り入れている。キトラ古墳と高松塚古墳では四神の図像がよく似ているが、高松塚古墳の四神のほうが大きく、細部が異なるので、同じ粉本によるのか、同系統の別の絵画を用いたのかはわから

ない。高松塚古墳の人物像は服装が中国とも朝鮮半島とも違い、飛鳥時代の服装に合致することが指摘されている。令の規定に照らせば天武天皇13～15年（685-687年）（有坂1999）、あるいは天武天皇11～13年（683-685年）（猪熊2007）、慶雲3～養老3年（706-719年）（石田1973、有賀2017）などの見解がある。年代論はおくとして、高松塚古墳の人物像は唐の絵画を丸写ししたものではなく、日本の画師が唐の画風で描いた独自の絵画である。四神や星宿図は人物の服装と違って改変する理由が少ないので、ほぼそのままであろう。

キトラ天文図と高松塚星宿図に円形金箔が用いられている点については、あくまで推測だが、7世紀末頃には唐に金箔を用いる装飾用の天文図の絵画があったものと考えておきたい。統一新羅では『三国史記』孝昭王元年（692年）に、唐から戻った道証が天文図を献上したと記されている。日本にも同じように唐の天文図や絵画などが持ち帰られたのであろう。

全体構成に話をもどすと、およそ唐の関中地区の壁画古墳とはその構造・壁画構成ともに隔たりが大きく、キトラ古墳・高松塚古墳の壁画が企画されるにあたって、唐の壁画古墳の実態をよく知ったうえで設計されたとは思えない。関中地区から遠く離れたモンゴルやトルファンの唐様式墓と比較すれば、そのことはより鮮明になる。あくまで日本の在地の石室形態を踏襲しながら、漆喰を塗って四神や天文図などを描くことを取り入れ、粉本を描き写して構成したものが、キトラ古墳・高松塚古墳の壁画と考えられる。

ではキトラ古墳・高松塚古墳の壁画はただの模倣で、でたらめなのかというと、そうではない。天井の中心から四方の壁に向かって、中心には北極があり、その周囲に二十八宿、日月、四神、キトラ古墳ではさらに十二支が、方位との関係も正しく配置され、地上世界を覆う重圏する宇宙の構造を正しくあらわしている（図20）。高松塚古墳においては、男子の従者が入口に近い側で入口を向いて並び、墓室の奥には屏風状の仕切りや宮殿の赤い柱と梁こそないが、女子たちが棺を囲んでいる。

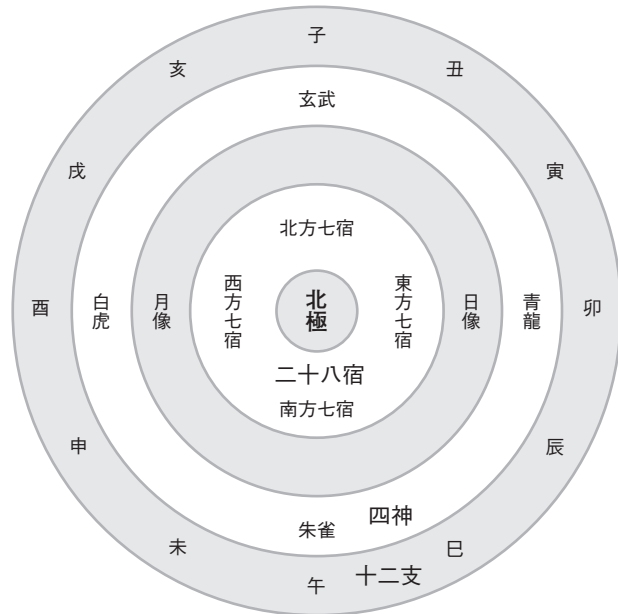


図20 概念図

方向性には則っている。つまり、キトラ古墳・高松塚古墳の壁画は、でたらめな寄せ集めではなく、天人相関や陰陽五行などの中国思想にかなりの造詣があり、壁画墓に描くべき壁画の構成についてもある程度の情報があつたうえで、構成されたものとみなされる。正確な知識を背景としつつ、日本式の古墳に適応させたものともいえる。

キトラ古墳・高松塚古墳の壁画の主題の中では、天文図・星宿図が思想的に最も重要と考えられる。どちらも中心に天帝の居所である北極が描かれている点を積極的に意味づけすれば、天子一族ないし相当に高貴な人物であるがゆえに北極を描くことができたという解釈も可能であろう。とはいえ、天井に北極を描くことが永泰公主墓や懿徳太子墓など関中地区の皇帝一族の墓で一般的にみられるわけではなく、前提となる理解そのものが仮説の域をでない。あるいは、キトラ古墳・高松塚古墳では本来消しておくべき北極を憚らずに描いてしまったのかもしれない、はたしてどこまで意図して北極を描いたのか、知るすべはない。もう少しいろいろな類例が増えるのを待つて研究を進める必要がある。

VII おわりに

キトラ古墳・高松塚古墳および中国・朝鮮半島の古墳壁画の研究は多岐にわたり、天文星宿の研究も膨大な蓄積がある。これらをすべて渉猟し自家薬籠中の物としたうえで、キトラ古墳と高松塚古墳を研究しなければ、正しい理解には到達できない。そう知りながら、資料収集も不完全なまま、あえて浅薄な知識をもとに検討してみたが、巡り巡って諸先学の賢明なる見解をようやく少し理解しえたにとどまった感がある。今後も研鑽を積み、壁画古墳の奥深い世界を探求していきたい。

註

- 1 高松塚古墳・キトラ古墳の主体部は石室または石槨と呼称されている。主体部の系譜から石棺式石室と呼ぶ研究者と、横口式石槨と呼ぶ研究者がいる。近年の文化庁事業やマスメディアなどでは石室を用いる場合が多いが、考古学用語としては石槨を用いることが多い。本稿では石室を用いる。
- 2 マルコ山古墳には漆喰があるが壁画がない。石のカラト古墳には漆喰も壁画もない。金箔が出土していることから、天井に金箔の天文星宿があつた可能性に言及する論（高橋2005）もあるが、確証はない。
- 3 キトラ古墳の名称は地元民からキトラと呼ばれていたことによる。高松塚古墳は、イモアナ古墳とも呼ばれていた（猪熊1994：p.148）。1971年撮影の明日香史跡研究会の写真にも「芋穴古墳」の名称がみえる（西田2022）。正式名称がイモアナ古墳になっていたら、印象も多少違っていたかもしれない。
- 4 天井に描かれた星座などの図を、キトラ古墳では天文図、高松塚古墳では星宿図と呼んでいる。それぞれキトラ天文図、高松塚星宿図と略称する。キトラ天文図は星図と呼ぶべき形態で

ある。古墳壁画の天文図や星宿図の類は文献・研究者によってさまざまな呼称があるので、本稿では厳密な使い分けはせず、総体を天象図、その他は個々の名称または便宜的な名称で呼ぶこととする。

参考文献

- 飛鳥資料館 2015『キトラ古墳と天の科学』飛鳥資料館図録第63冊
- 東潮 1999「北朝・隋唐と高句麗壁画」『国立歴史民俗博物館研究報告』80 pp.261-325
- 東潮 2013「モンゴル草原の突厥オラン・ヘレム壁画墓」『徳島大学総合科学部 人間社会文化研究』第21巻 pp. 1-50
- 網干善教 2006『壁画古墳の研究』学生社
- 有賀祥隆 2017『日本絵画史論攷』中央公論美術出版
- 有坂隆道 1999『古代史を解く鍵』講談社学術文庫
- 石田尚豊 1973「高松塚古墳壁画考（一）（二）」『MUSEUM』263 pp. 4-18、264 pp.22-29
- 猪熊兼勝 1994『飛鳥の古墳を語る』吉川弘文館
- 猪熊兼勝 2007「高松塚からキトラ古墳へ」『仏教藝術』290 pp.13-24
- 上田宏範 1972「唐代古墳壁画と高松塚古墳」『壁画古墳高松塚 調査中間報告』奈良県教育委員会・明日香村 pp.117-139
- 加藤真二 2008「獣頭人身十二支像について」『キトラ古墳壁画十二支一子・丑・寅一』飛鳥資料館図録第48冊 飛鳥資料館 pp.21-36
- 川瀬由照 2014「東アジアにおける十二支」『特別展 キトラ古墳』朝日新聞社 pp.54-55
- 来村多加史 2019『上下する天文』教育評論社
- 金基雄 1980『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版
- 小泉顕夫 1986『朝鮮古代遺跡の遍歴 発掘調査三十年の回想』六興出版
- 佐々木英治 1989『滝谷寺蔵『天之図』の研究』
- 相馬充 2016「キトラ古墳天文図の観測年代と観測地の推定」『国立天文台報』第18巻 pp. 1-12
- 高橋克壽 2005「第Ⅴ章 考察」『奈良山発掘調査報告 石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査』奈良文化財研究所学報72 奈良文化財研究所
- 竹迫忍 2017「中国古代星図の年代推定の研究：初唐の星座の姿を伝える最古の星図『格子月進図』」『数学史研究』228 pp. 1-21
- 竹迫忍 2018（2019追記）「『キトラ天文図』に関する誤解」<http://www.kotenmon.com/str/kitora/kitora.html> 2022年9月1日閲覧
- 高松塚古墳総合学術調査会 1973『高松塚古墳壁画調査報告書』
- 百橋明穂 「キトラ古墳壁画の美術史的位置」『仏教藝術』290 pp.33-42
- 中村士 2018『古代の星空を読み解く』東京大学出版会
- 奈良文化財研究所 2016『キトラ古墳天文図 星座写真資料』研究報告第16冊
- 西田紀子 2022「明日香村内に伝わる地籍図と写真」『奈良文化財研究所紀要2022』 pp.38-39
- 林己奈夫 1989「中国古代における蓮の花の象徴」『漢代の神神』臨川書店 pp.219-280
- 前原あやの 2015「星座の三家分類の形成と日本における受容」『東アジア文化交渉研究』8 pp.295-311
- 宮島一彦 1999「日本の古星図と東アジアの天文学」『人文学報』82 pp.45-99
- 宮島一彦 2007「キトラ天文図と東アジアの古星図」『仏教藝術』290 pp.43-48

- 宮島一彦 2020「日本古代の天文知識」『新陰陽道叢書 第一巻 古代』 名著出版 pp.339-373
- 村上智見・オチル A.・エルデネボルド L. 2021「モンゴル国の唐様式墓から出土した染織品：僕固乙突墓とオラーン・ヘレム壁画墓」『金大考古』79 pp.52-67
- 吉澤康暢 2015「三国町瀧谷寺の「天之図」に関する新知見」『福井市自然史博物館研究報告』62 pp.17-26
- 吉田光邦 1972「高松塚の星象・四神図について」『仏教藝術』87 pp.56-64
- 伊世同 1975「最古の石刻星図」『考古』1975-3 pp.153-157、付図
- 莊蕙芷 2016「理想與現實：唐代墓室壁畫中的天象圖研究」『南藝學報』13 pp.1-45
- 潘鼐 2009『中国古天文図録』 上海科技教育出版社
- 王仁波 1973「唐懿德太子墓壁画题材的分析」『考古』1973-6 pp.381-393、p.371、図版
- 汪勃 2002「高松塚古墳壁画天文図の年代」『関西大学博物館紀要』8 pp.29-46
- 河北省文物研究所 2000『河北古代墓葬壁画』 文物出版社
- 河北省文物研究所 2001『宣化辽墓』 文物出版社
- 新疆维吾尔自治区博物馆 1973「吐鲁番县阿斯塔那—哈拉和卓」『文物』1973-10 pp.7-27
- 浙江省文物管理委员会 1973「杭州、临安五代墓中的天文図和秘色瓷」『考古』1975-3 pp.186-194、図版拾
- 浙江省文物考古研究所，浙江省博物馆等编著 2012『晚唐钱宽夫妇墓』 文物出版社
- 杭州市文物考古所・临安市文物局 2000「浙江临安五代吴越国 康陵发掘简报」『文物』2000-2 pp.4-34
- A. Очир・Д. Эрдэнэболд 2013『ЭРТНИЙ НҮҮДЭЛЧДИЙН БУНХАНТ БУЛШНЫ МАЛТЛАГАСУДАЛГАА』 УЛААНБААТАР (A.オチル、L.エルデネボルド 2013『古代遊牧民の墓の発掘調査』)

挿図出典

- 図1：奈良文化財研究所作成
- 図2：A. Очир・Д. Эрдэнэболд 2013『ЭРТНИЙ НҮҮДЭЛЧДИЙН БУНХАНТ БУЛШНЫ МАЛТЛАГАСУДАЛГАА』 図5
- 図3、4：王仁波 1973「唐懿德太子墓壁画题材的分析」『考古』1973-6 図3、図3-14
- 図5、6：奈良文化財研究所 2016『キトラ古墳天文図 星座写真資料』研究報告第16冊 PL.3、PL.5
- 図7、19：奈良文化財研究所蔵・撮影
- 図8、9：浙江省文物考古研究所，浙江省博物馆等编著 2012『晚唐钱宽夫妇墓』 挿図3-11、挿図4-52
- 図10：杭州市文物考古所・临安市文物局 2000「浙江临安五代吴越国 康陵发掘简报」『文物』2000-2 図27
- 図11、12：伊世同 1975「最古の石刻星図」『考古』1975-3 図3、図4
- 図13：浙江省文物管理委员会 1973「杭州、临安五代墓中的天文図和秘色瓷」『考古』1975-3 図8
- 図14～17：河北省文物研究所 2001『宣化辽墓』 図29、図204、図167、図215
- 図18：新疆维吾尔自治区博物馆 1973「吐鲁番县阿斯塔那—哈拉和卓」『文物』1973-10 図23
- 図20：筆者作成